

漱石作品の三角関係

Junko Higasa 2013.12.23

漱石は小説で殆ど一貫して三角関係を描いている。それは女一人を廻る男二人の経済力・地位・容姿などの有利不利をベースに起る精神的葛藤である。男も女も「果たして本当に愛しているのだろうか」精神が勝つのか、付属物が勝つのか。意志を貫いていたなら成就できたのか。相手に勝つことに囚われて自分の本心を見失なっていなかったか。退くべきか、進むべきか。それは理論では解明できない。途中どんな因子が発生して反応が変化するか予測できないからだ。そして男同士の友情を失ってまで勝ち得た恋も手に入れた途端に色褪せる。男は結婚後の女の変化に戸惑う。そこで自分を馴らすか、他の愉しみを考えるようになる。男の恋とはどこか臆病である。

さて、そんな作品群とは真逆に『虞美人草』と『明暗』は男一人を廻る女二人の精神的葛藤である。先に挙げた条件の有利不利に女が悩む。女は意思を貫くことが出来るか。自他の付属物に勝つことが出来るか。しかし先の男と違って女は友情よりも恋が優先するだけに自分の意思が確実である。種族維持のための手練手管と涙という生物学上の特権をもって、進退に悩まず如何に男を獲得するかに専心出来る。

漱石はこの女の特権解明を著作の目標にしていた。それを専業作家第一歩の『虞美人草』に描き、自分の人生『道草』を書き終えての再出発『明暗』に著したのは、自分の目標への立ち戻りであろうと思う。